

「九龍城砦」は今 ～記憶を資産に変える香港の観光戦略～

大分銀行 香港駐在員事務所 所長

江口 博史

香港映画『トワイライトウォリアーズ 決戦！九龍城砦』はもうご覧になりましたか？本作は今年の日本アカデミー賞「優秀外国作品賞」にも選出され、久しぶりに香港映画が日本で注目を浴びました。

この映画の人気を受け、多くの日本人観光客が作品の舞台を訪れる「聖地巡礼」を目当てに香港を訪れています。私自身、作品で描かれた独特の世界観に興味を惹かれ、先日、映画の舞台が再現されている九龍寨城公園を訪れてみました。

園内に足を踏み入ると、雑然と掲げられた看板や複雑に絡み合った配管が目に入ります。これら細部までこだわったセットは、かつてそこにあったエネルギーに満ちた人々の営みが伝わってくるようで、映画の世界に引き込まれていく感覚でした。



(写真：展示の様子)

その魅力の根源は、映画が描く「九龍城砦」という空間そのものにあるのでしょうか。ここはかつて、無政府状態でありながら独自のルールと助け合いの精神で成り立つ、驚異的に密集したコミュニティでした。現代社会では感じにくい、「カオス」ともいふべき雑多な雰囲気、多くの人の共感を呼んでいるのだと思います。

香港政府は、この映画のヒットを単なるブームで終わらせないよう戦略を打ち出しています。2025年9月に日本で開催された「ツーリズムEXPOジャパン」では映画のセットを展示、さらに九龍寨城公園での3年間の展示継続を発表しました。映像や音楽で当時の生活音を再現し、映画で使われた椅子に座って記念写真が撮れるなど、没入型の体験を提供する工夫が随所に凝らされています。

※写真は筆者撮影

「九龍城砦」は今 ～記憶を資産に変える香港の観光戦略～

大分銀行 香港駐在員事務所 所長

江口 博史



(写真：展示の様子)

かつてのスラム街「九龍城砦」は、解体後に中国風の落ち着いた庭園として整備されましたが、いわゆる観光地としての活用には至っていなかったとの見方もありました。しかし映画のヒットを契機に、単なる「史跡」から「没入型エンターテインメント空間」へと生まれ変わらせることに成功しました。

香港の夜景を彩ったネオン看板が安全性の観点から撤去されつつあるように、過去の全てを物理的に保存することは現実的ではありません。しかし香港は、失われつつある「記憶」や「情感」を、安全で管理された形での「体験」として甦らせる道を選んだ、と言えるでしょう。

この事例は、過去を保存するのではなく、その核となる価値を見極め、現代的なコンテンツと結びつけ「再解釈」することで、新たな価値を創造できることを示しています。「ストーリー」や「情感」が持つ力の大きさを物語っていると言えるでしょう。

まだこの映画をご覧になっていない方がいらっしゃいましたら、一度見て、そして、香港で現場を体験してみたいかがでしょうか。

※写真は筆者撮影